

「いじめ」に対するアドラー的接近

香川三六*

* 不動塾（東京都三鷹市）（当時）

要旨

キーワード：

はじめに

今年（1985年）1月、水戸市で起きた中学2年少女の「いじめはもう止めて」と訴えての自殺事件が、大きく報道されて、この問題の深刻さが新たな注目を浴びるに致った。昨年末、警察庁が発表した少年非行白書によれば、校内暴力は若干鎮静化の傾向が、みられるが「いじめ」にからむ凶悪事件が急増しているという。

このような事態を踏まえて、文部省は小学生のいじめの問題に焦点を当てた教師用指導資料を出した。さらに、最近の報道によれば、これらの問題の発生は家庭における幼児のしつけに問題ありとして、資料を作成し全国の教育委員会に配布したという。一方、日教組も、前の研修大会で、学校の荒廃問題に時間を割き、教師自ら意識改革が必要との反省がなされたという。

また、2月4日の報道によると、法務省もこの問題の解決に取り組む方針を決定したという。法務行政の柱のひとつである人権擁護・人権尊重の立場からということなのであろう。そして、人権擁護関係者の共通した認識は、学校・教師・家庭・親・子供に人間尊重の精神が欠けているためであるとのことである。また、この問題の相談業務を担当している第一線の人権擁護委員から法務省への報告によると、親が担任教師に相談を持ちかけると「あなたが弱い子供に育てたから」とか「もっと明るい子供にきなさい」とかなど、その場限りのお座なりの言葉が返ってくるというのもあるそうであって、教師の対応のおくれを示している。「人権尊重の精神を、大人側にも子供社会にも浸透させる努力が必要」との声がこれら委員のなかで叫ばれているということである。法務省は、そこで、これら委員の協力のもとに、相談業務の窓口を広げて適切な助言を与える一方、人権侵犯の事実が明らかにされた場合には、人権擁護機関は学校当局と連絡をとり、いじめの子供及びその親に対して、勧告・説示などの処置をとることもあり得るという。以上あげた関係政府機関のこの問題に対する認識や対策が、この問題の解決に成果をあげることを期待して止まない。しかし、何々すべきであるなどの掛声や建前論あるいは罰則の強化や威嚇などでは根本的解決にならないことを指摘しておきたい。

さて、わたくしは一人のアドレリアンとして（わたくし自身がアドレリアンといえるかどうかいささか忸怩たるものがないでもないが）この問題に接近しその対策を思考することは、わたしにとって価値あることと考えている。また、それを本誌に発表しようと思った所以のものは、この文の内容が、誤謬と偏見に満ちておればおるほど（そうにちがいないと思うが）アドレリアン

の先輩諸賢の指摘や批判が得易いかも知れないし、その対策もまた、よりの確な優れたものが提供されるであろうことを期待できるだろうと、一方的に、手前勝手に、決めてかかったからである。自分の勉強のために貴重な紙面をけがすとは何ごとかとの叱正には、ただただ、平身低頭するだけである。そこで、どのような反論にも耳を傾ける用意があるし、また、そのような素直さと子供ッぽさのある老人であることをまずお伝えしておきたい。

I いじめの現状とその特徴

いじめという言葉は、そもそも、(弱いものに対して) 傷めつけたり、嫌がることをして、相手を困らせるという意味である。

「子供の世界では、昔からあったことで今に始まったことではない。今更騒ぎたてるほどのことではなかろう」という人がいる。果たしてそうであろうか。

いじめという言葉自体は過去も現在も同じであるとしても、その中味からみると全く違った概念であるとしか思えないほど違うように思う。そこで、それらを比較することを通じて、いじめの現状なり特徴を浮き彫りにすることから始めよう。

(1) 意味あい

過去のいじめ——筆者の体験は、60余年前の中学生時代と1947年～1951年の新制中学教師時代とのそれに過ぎないが——には、多分に制裁的な矯正的な意味合いがあったように思う。従って、過去のいじめは、いじめという言葉の本来の意味に当たるかどうかにはさえ若干の疑問が残るのであるが、そこには、正義とか任侠とかいうにおいすらあったと覚えている。

これに反して、現在のいじめには、正義・任侠といったにおいは微塵も感じられない。すなわち、次の項にあげたいじめ方をみても、あいてを嫌がらせるという概念を遥かに越えて人権蹂躙そのものといわざるを得ないものばかりである。2月のあるテレビ番組でみたのであるが、いじめについてどう思っていますかというインタビューに答えた中学生の言葉を聞いていて一層その感を深くしたし、急激な社会の変化のもたらした恐ろしさを感じて心が傷んだのであった。

(2) いじめの型

過去のいじめの方法は、ビンタが主体であった。稀に、蹴りや竹刀・木刀も使われたが、一口に言って、野蛮ではあったが、カラっとして後には何も残らないといったものであった。また、まわりの者もいじめ側の行為を納得していた。つまり、ビンタされるべきものがされていたのである。これに反して、現在のいじめの型は、次にあげるように多種多様であって、単純ではない。一口でいうとするなら、極めて陰湿であり残忍そのものといえる。

現在のいじめの例

i) 肉体的なもの

死刑・カステラリンチ・ラムネゲーム・シヤモリンチ・ミッチェル遊び・茶きんずし・たこ部屋遊び・サンドバックなど名前だけでは全然わからないがまことに多様で聞けば聞くほど陰湿そのものばかりである。

ii) 精神的なもの

シカト・ばい菌遊び・はぶ・三浦遊びなど聞いてみると非人道的なものばかりである。

教育評論家の遠藤豊吉氏は六つのパターンに分類しているが（省略）その多様さには驚くほかはない。中世のヨーロッパで犯罪者に対する重い刑罰として有名な「無視」が、現在、「シカト」と呼ばれるいじめの型として用いられていようとは何と考えるとよいのであろう。さらに、肛門をカッターナイフで切る、小石を詰め込む、男の子を集めて女の子の真裸を見せる、写真をとらせるなど、性風俗の現状を反映したようなものまでであるという。

過去のいじめとは全く異質なものとわざるを得ない。

(3) いじめの対象

過去のいじめは上述のように、人の行為に対して行われたから、いじめの対象は、不特定多数であったし、いじめる側は、特定少数であり、一般に硬派と呼ばれていた連中であった。これに対して、現在のいじめは一般に弱い子供に向けられる。つまり、いじめられる側が特定少数である。いじめる側は不特定多数である。

リーダーがいて、その他大勢がいじめに加わる。その他大勢がいじめる側につくのは、いじめの側についていないと自分がいじめられるようになるかも知れない不安や恐怖感によるといわれている。

要するに、過去のいじめは特定少数が不特定多数の行為を対象としたのに対して、現在は、不特定多数が特定少数の子供を対象とするのである。全く逆の状況なのである。

一般に、特定少数の子供は弱い子供である。例えば、転校生徒（農村から都市、外国からの帰還者の子弟など）、器官劣等性の子供・片親の子・家庭に問題の多い子供などがあげられている。過去においては、これら立場の弱い子供は強い子供の庇護の対象ですらあった。何という変り方であろう。

(4) いじめの場・時など

過去のいじめは、校内の人目を避けた物陰で行われた。時間は大体下校時であった。これに反して、現在のいじめは衆人環視のなかで行われる、場所も校内外はもとより個人の家庭のなかに持ち込まれる場合すらあるというし、時も限定なくいつでもとのことである。

以上、現在のいじめを過去のそれと比較しながらその特徴を述べてきたが、この両者は全く次元の異なるもので、何らかの対策を講じなければエスカレートする可能性が多分にあるように思われる。

II アドラー的接近

いじめの問題に接近するには、現在のようないじめが、いつから、なぜ、どのようにして、横行するようになったのか、校内暴力が鎮静化の傾向になっていじめが急増するようになったのはなぜかなどの原因論的接近と、いじめる目的は何か、いじめられる目的は？ など目的論的接近とがあり得る。本問題の対策を考える上でその両方が必要かも知れないが、アドレリアンとしては、当然、目的論から接近し、もし必要が生じたならば、原因にも論及するという方向を取るべきであろう。

さて、いじめの目的は何であろうか？ I、で述べたように、いじめる側は不特定多数であるがリーダーがいるので、そのリーダーに焦点をあて、次の2つの視点から、いじめの目的を考えてみることにする。

(1) 劣等（優越）コンプレックス

(2) ストレスの解消

(1)については、リーダーにコンプレックスがあるのかも知れないという視点から、(2)はリーダーにストレスが強くそれを解消する目的があるのかも知れないという視点から考えてみようとするのである。

(1)劣等コンプレックス

人は自分（リーダー）を常に見下し勝ちだから、自分は大したものなのだということを見せなければならないと考える。そう考えるのは自分は本質的には弱いと自認しているのである。だから、より弱い立場にあると感じる子供を脅かし傷つけ罵倒などしてその子供を支配し、強く見せようとする。人に強いとみせるのは、できるだけ多勢の人達に見せる方がより効果的であると思う。過去のいじめは、特定の人々の行為を矯正することを目的としたから、人目につかない物陰で行われたと見るべきであろう。

さて、自分は弱いのであるから強くなろうと考え、その目的に向かって努力するであればそれは人生にとって意味のあることである。

しかし、強がるということは、人を欺き自らを偽る行為であるから、それに努力することは人生にとってマイナスの意味でしかない。優越感（劣等感）を見せようとするのを、コンプレックスとアドラー心理学は教えている。従って、いじめる人はコンプレックスの持主とってよいだろう。

アドラー心理学は、また、コンプレックスの原因としては、器官劣等性・甘やかし・無視をその主たるものとしてあげているが、現在のわが国の家庭では一般に子供は甘やかされて育てられていることは衆知の事実である。過保護・過干渉と呼ばれているものである。その具体的な結果として、登校拒否・家庭内暴力・校内暴力・非行・無気力などがある。いじめもまたこれらと並ぶほどにその場を獲たといえるのだろうか。また一方、共稼ぎ家庭が増加して愛情不足（無視とはいえないまでも）もまた原因のひとつとなり得るかも知れない。

一般に、コンプレックスのある子供は、共同体感覚が乏しい。すなわち、協力することの有益さ、必要性を知らないし、当然その訓練も受けていない。まして人の役に立ち感謝される幸福感を味わった経験など少しもない。対人関係は未熟であり、思いやりの心が欠けている。このことが、いじめの基本的な背景といえるだろう。

いじめられる目的については後述するが、いじめられる子供が劣等コンプレックスの持主であることは誰しも納得し易いところである。同じようにコンプレックスの持主でありながら、反対の立場になるのは、恐らく、その子供のライフスタイルの相違によるのであろう。いじめ側の子供は“ネアカ”いじめられ側の子供は“ネクラ”なのであろう。“曝”と“鬱”といってもよいと思う。

要するに、いじめるという言動の目的は、自分を強いものに見せようとするのであって、それはコンプレックスのなせるわざとみたのである。

いじめられる子供の目的について簡単に触れておこう。

いじめられっ子が劣等コンプレックスの持主であり、その原因が甘やかしである場合、この子供は家庭では関心の的であったにちがいないであろう。そしてネクラで弱々しいとき、長ずるに及んで友達が離れていって関心の払われる場が少なくなるであろう。少なくとも、いじめられている間は、多くの子供、場合によっては教師の関心をも引くことができる。としたならば、関心を払われないよりも、いじめられてつらいけれども、関心が払われることの方を選ぶかも知れない。しかし、現在のいじめは生やさしいものではない。ますます陰湿・残忍の度を加え死に致らしめた事実をも見るとき、いじめられにも目的があると言ってよいのであろうか。自殺にもまた目的

があるとは思ふものの、割り切れないものを覚えざるを得ない。

(2) ストレス解消の目的

わが国社会は、民主化と物質文明とが異常なまでに急激に進んで、社会のあらゆる面に大きな混迷と矛盾をもたらしたが、その変化のひとつの断面はあらゆる階層の人びとにストレスが強まったことであろう。子供社会もその例外ではあり得ない。学校生活であれ、家庭生活であれ、校外生活であれ、子供にとってストレスになるものが充満しているように思う。例えば、現在の中学・高校は正に“管理された社会”である。これについては多言を要しないであろう。そして学校内に荒廃の傾向が見えるとますます規則や罰則だけが強化される傾向が見られ、それがストレスを増幅しさらに荒廃が進むという悪循環が見られるという。また、形を整えることだけによって心が整うと考えているのかとさえ思えるほどに髪型・服装などに極端にこだわる傾向がある。

偏差値重視の教育・勉強の出来不出来がすべてのように見える人間評価、知徳体の知だけを重視するといった風潮のなかで、勉強のできの悪い子供がストレスを受けない筈はない。それは勉強のできる子も同じだと思う。

この傾向は家庭にも強い。学歴社会といわれる今日、家族価値が学業におかれるとしても、それを非難できないけれども、親が子供自身の人生のルールを敷き（例えば学校の選択）その上をヒタ走るように強要するならば、それは強いストレスをひき起こすであろう。親のいうことを何でも素直に聞けば認められるというライフスタイルの人が社会で働くようになったとき、創造性に乏しい、責任回避型の、服従型サラリーマンになるであろう。大学をでていて、人生の幸福とは何のかかわりもないと思うのであるがどうであろう。そのストレス解消のために運動競技をしようとしても学校には制限があり社会には適当な場が少ない。

管理された社会で引き起こされた強いストレスを解消する目的にいじめがあると考えたのである。校内暴力もまたその目的のためと考えられるが、学校側が最近警察へ依頼することが多くなって若干鎮静化の傾向となり、その分、いじめが急増したり、悪質化が進んだと見ることができよう。

III 対策

以上に述べてきた、いじめに対する見方や考え方に基本的な誤りがあるならば、この項は全く無意味であり無駄なことである。また、若し、大筋において大きな誤りはないとしても、この項は蛇足といえるだろう。なぜならば、いじめの目的のなかにその対策が自らふくまれていなければならないからである。どちらにしても、この項は必要がないわけであるが、対策には恒久策と応急策があるべきだし、また、重点の置きどころもあろうから、敢えて、つけ加えることとした。

(1) 恒久策

いじめる、いじめられるの双方にコンプレックスがあると考えてきたし、それが基本的な問題点と考えるならば、コンプレックスの治療と予防とをすすめることが、いじめを追放する恒久策でなければならないだろう。

アドラー心理学は、勇気・自信・共同体感覚の養成が予防と治療の決め手であることを教えている。そのためには、家庭・学校・地域社会のすべての子供の場で、次のような対策を運動的に実践することを提案したい。

- (1) 子供の欠点・能力不足を指摘したり、批判・非難したり、あるいは、指示したり、説教したり、威嚇したりなどによる「しつけ」に代えて、子供の長所・能力に眼を向けた“勇気づけ”を基調とした「しつけ」、口だけで教える代わりに、結果から学ばせる「しつけ」に転換すること
- (2) 人の役に立つという実感の得られる場を与え、その努力に対して感謝されることから生まれる幸福感を味わわせること
- (3) 子供の自立をうながすため、子供が出来ることでなければならないことに大人は一切手を借さないこと。大人が手を借せば、子供のやる気を奪うだけでなく、責任ある行為をとらなくなるだろう、ストレスの大きさはおせっかいの大きさに比例すると思うし、家庭内暴力や無気力の温床となるであろう。

以上の外、子供のストレス解消にスポーツなどの遊びは欠かせないから、地域社会として、広場の確保などに万全の対策を期待したいと思う。

(2) 応急策

「あなたが子供をもっと強い子に育てなかったからだ、もっと強く育てて下さい」こんなせりふを吐く教師がいる限り、いじめは永久に変わらないだろう。学校のなかで行われるいじめは、学校教師の責任であるとの自覚に立ち、撲滅のための積極的な心構えが何よりも必要であることはいままでもないが、実情をふまえての具体策を持って努力しなければ、火に油を注ぐ結果になりかねない。

ここに一策を提案してこの項を終わりたい。いじめの現状の項で述べたように、現在のいじめは、いじめる側が不特定多数である。いじめる側についていないと、いつ自分がいじめられるかわからないという不安感や恐怖感があるからだといわれている。それらの子供のなかには、いじめられる子供への同情ないし正義感にかられているものが必ずいるにちがいないと思う。傍観者にもいると思う。ただ、そのことを口に出せないでいるのであろう。

学校教師が現場で観察していれば、それらの子供を見分けられない筈はない。その一人一人に先生達が一対一で、正義感や任侠心にうたえて説得したらどうであろう。不安感・恐怖感を先ずとり除き、勇気づけを行うことによって、勇気と自信を培うのである。それら子供達によってリーダーに対する認知療法を行いながら、いじめという行動に移る直前それらの子供達が輪をつくっていじめられっ子を取り巻くといった行動をとったらどうであろう。

これはホンの思いつきに過ぎないが、子供のことは子供同志で解決せしめるという原則に立ち、教師が縁の下の力持ちとして援助するというやり方を教師自身に経験して欲しいと思う。

終わりに

「人は人から認められたときに生命の実感がある」。

このことばは、不動産主管香川辯道（筆者の長男）が、いじめられの目的について話したときに言ったことばである。前に誰かが言ったことばなのか、自分でそのときに造語したのかは知らない。が、真理であると思う。それは人間の本能であるとも思う。従って、子育ての考え方は、人生に意味のある言動に子供が努力したとき、それを認めて「勇気づけ」をすることになければならない。もしそれをあたり前のこととして認める言動をとらないならば、また、もし、人生にとって意味のない行動をとったときにのみ関心を払うことをするならば、その子供はその言動が悪いと自覚していても、その行動をするだろう。

こんなことを考えながら、読み返してみると、もの足りないところやもの足りすぎた？ところが目立って投稿をためらう思いがある。いずれまた、この問題はとりあげてみたいと思う。アドレリアン先輩諸賢のご叱正を期待しつつ筆を欄く。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載